

■山田一郎 創生期の東大卒業しながら、敗残者の道を奇人として歩み、天下之記者といわれながら、野垂死した。

やまだいちろう

桜田門外変・1860＝ 安芸国安芸郡府中村で、藩の御譜代番組で勘定方つとめた山田義綱の長子に生まれる。

禁門の変・・・1864＝ 4歳：温厚謙譲な父から、「大学」の授読を始め、

薩長同盟・・・1866＝ 6歳：「四書」の素読を終える。

大政奉還・・・1867＝ 7歳：父が大坂勤番となったため、父の友人、次いで、村の神主について学び、

明治維新・・・1868＝ 8歳：維新となって、父が帰藩、

戊辰戦争終・・・1869＝ 9歳：藩の学問所に入り、

初の日刊新聞1870＝10歳：早くも質問生となる。

廃藩置県・・・1871＝11歳：皇学所に入學するも、廃藩置県で閉鎖される。この年、父が郡書記となる。

学問のすすめ1872＝12歳：家に滞在するうち、母が死去。

明治6年政変 1873＝13歳 継母が来るもまもなく死去。児童教場で先生を勤めた後、私学{遷喬舎}併設の小学師範校教員試験に合格

するも、英語の存在と価値を教えられると一転、同校横文科に入學するも、英人教師について行けず、

佐賀の乱・・・1874＝14歳：日本人教師に代わって理解し始め、抜群の成績、官立広島外国語学校開校で、同級全員とともに編入。

初の民間工場1875＝15歳：新たに入った継母とは折り合いが悪く、

三つの内乱 1876＝16歳：異母弟が誕生。選ばれて東京開成学校に入學、知人宅に止宿、以後、めったに帰省せず、

西南戦争・・・1877＝17歳：この年、東京大学と改称される。

大久保暗殺 1878＝18歳：

（入學・卒業は前後するも）同級生に、坪内逍遙・三宅雪嶺らがおり、同じ文学部(政経学部)の高田早苗・市島謙吉らと親友になる一方、自らの小心几帳面隠し、なりが異様でよくしゃべる人物として目立ち、珍しく父と郷里の山に登る。<明治14年の政変>で、大隈重信とともに追放された小野梓に、同級生とともに共鳴し、{鷗渡会}結成に参加、

新体詩抄・・・1882＝22歳：高田らとともに、最も順調な組として、東大を卒業し、文学士となる。小野が大隈をかついで立憲改進黨をつくると、{鷗渡会}は親衛隊となり、続いて設立した東京専門学校(早稲田大学)の教員になるとともに、改進黨機関紙{内外政事情}の編集長にされる。6つ年上で弁護士事務所開いた親友岡山兼吉の家に同居、

岩倉具視没 1883＝23歳：{内外政事情}が廃刊に追い込まれて挫折、以後、教職に専念し、

秩父事件・・・1884＝24歳：*学生のためとはいえ日本初となる優れた「政治原論」を著述し、学校の監督を務めるうち、{改進黨}解散話が

起こると断固反対して残り、早稲田グループと疎遠になり始め、

内閣発足・・・1885＝25歳：開設された英吉利法学校(中央大学)に、政府が早稲田をつぶすべく肩入れした際、岡山らがそれに乗って騒動を起こし、法科存続についての会議後、自暴自棄になり、早稲田を辞め、自作詩集をつくって友人らに配布、地方に天下る唯一の文学士として、静岡県興津で{静岡大務新聞}主筆していた教え子を頼って客員記者となり、国会開設に向けて、{改進黨}の影響拡大に努める。東京との格差に愕然とし、以後、東京専門学校機関誌にしきりに寄稿して、学生らに地方開拓を呼びかける一方、自ら地域に諸団体を組織し、演説して回り、東京から著名人を呼ぶ。

帝国大学始 1886＝26歳：*高田と市島が来訪帰京直後、小野が死去すると、静岡で追悼会催し、同級生代表で「東洋小野梓君伝」刊行。静岡を通過する福沢諭吉の懇親会催し、演説させたりするも、同級生出世著しく、敗残の色濃くなり、

国民之友始 1887＝27歳：

初の対等条約1888＝28歳：一時帰郷し、結婚するも、妊娠すると里帰りさせ、以後そのまま別居。翌年誕生する子とも生涯会わず、

帝国憲法発布1889＝29歳：翌年の第一回衆議院選挙に向けて演説して回るうち、突然、静岡を逃げ出し、{富山日報}主筆になるも、

帝国議会始 1890＝30歳：父が死去。辞めさせられ、帰郷。立候補するも落選すると、上京し、再び岡山の法律事務所に寄寓。

天津事件・・・1891＝31歳：岡山のものを去り、零落不明となる。年末までには掛川に落ち着いたらしく、

持病の持疾に悩みながら、掛川で寺子屋の先生をしていると、

日清戦争始 1894＝34歳：来訪した岡山が帰京後死去、同級生で追悼録をつくらうという話になり、

日清戦争終 1895＝35歳：市島に東京に連れ戻されて専従、大酒飲みながら几帳面に仕事し、半分削られても600ページ近い大部の「梧堂言行録」をまとめる。「遼東還付無責任論」ほか、各地の新聞に論説を書き送り始めるとともに、

白馬会・・・1896＝36歳：*それなりに歓迎を受けながら、各地を転々とする漫遊・放浪の生活を送り始め、

八幡製鉄始 1897＝37歳：大隈重信が通過すると聞いた掛川に駆けつけてタイコモチの役割を演じ、市島らに東京に呼ばれて、東京

専門学校評議員にされ、{早稲田学報}主幹として給料の面倒まで見てもらい、後輩の読売記者と懇意になっ

て、傑作紀行文「強羅温泉之記」を連載したりするも、同級生らの売出し画策されるのに耐えられず脱走、

子規句歌革新1898＝38歳：立候補すべく帰郷するも、直前にまた尻込み。{読売新聞}に「福翁百話を読む」を長期連載、

ビア/国産化 1900＝40歳：放浪生活を打ち切り、東京日本橋の旅館に落ち着き、以後、全国各地の新聞に送る記事を大量に書き続け、

田中正造直訴1901＝41歳：福沢諭吉が死去すると、「大常識福沢翁の逝去」の論評を書く。

教科書疑獄 1902＝42歳：東京専門学校が早稲田大学になると、感謝頌表を贈られ、

日比谷公園 1903＝43歳：*{山梨日日新聞}に「文学士山田一郎」の逸話が連載されると、{山梨民報}に、全て事実無根と反駁文。

日露戦争終 1905＝45歳：奇人伝説をつくり上げる一方、衰弱が進み、

(東京)大学病院で、野垂死同様に、没した。

市島ら同級生の早稲田グループは鄭重に葬儀を行い、翌年、後輩の薄田斬雲に「天下之記者 一名山田一郎君言行録」をつくらせ刊行した。